The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アメリカ帝国主義成立史の研究
Author(s)	高橋, 章
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43080
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 12 】

氏　　名	高橋　章（たかはし　あきら）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　14969　号
学位授与年月日	平成11年10月12日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**アメリカ帝国主義成立史の研究**
論文審査委員	（主査） 教授　川北　稔 （副査） 教授　合阪　學　　助教授　竹中　亨

論文内容の要旨

1890年代末から、つぎの世紀の初頭にかけて、アメリカの対外プレゼンスのありかたには、際立った変化が生じた。マルクス・レーニン主義的な史観にもとづき、一般に「アメリカ帝国主義の成立」として把握されてきたこの現象を、近代世界システム論と「コーポリット資本主義」論という二つの新たな視角から再検討し、アメリカ現代史の基本性格に迫ろうというのが、本論文の趣旨である。提出された論文は、A5判360頁をこえる重厚な著作である。

第I部は、C・A・ビーァドにはじまるアメリカの膨張主義にかかわる、内外の研究史がたどられ、とくに外交史研究のウィスコンシン学派の中心人物W・A・ウィリアムズや清水知久氏の立場を継承して、膨張主義がこの時代に急に出現したものではなく、アメリカ建国以来のひとつの伝統であること、しかし、同時にこの時代には、いわゆる農業的な「大陸的膨張」から、海外貿易の権益、とくにアジアに対する門戸開放などをとなえる、商業的膨張論に決定的に変化し、新しい意味をもつようになったことが史学史的考察をつうじて指摘される。そのうえ、米西戦争からジョン・ヘイによる門戸開放宣言にいたるまでの、具体的な合衆国の極東政策史がたどられる。

つづく第II部では、都市化・大企業の成立、フロンティアの消滅、農民の困窮、労働運動の発生など、アメリカ経済・社会が危機的な状況にあったこの時代に、この危機からの脱出をめざす思想のなかに、新たな対外プレゼンスのありかたを模索する思想がつぎつぎと出現したことが説かれる。また、他方では、この時代は、近代世界システムのなかでのイギリスのヘゲモニーの衰退、ドイツと合衆国による新たなヘゲモニー争いの始まりも意味したから、これらの思想には、このような事情も反映されていた。すなわち、イギリス史家のいう自由貿易帝国主義論に近いアルフレッド・マハンの「海上権力」論、いわゆる文明興亡論を前提として、アメリカの衰退は、国内におけるコーポラティズム（団体主義）と海外への経済的膨張によって解決されるとしたブルックス・アダムズの議論、さらには、トラストの形成と資本輸出に解決策を求めたホブソンの先駆としてのC・A・コナントの思想が、分析・紹介される。

第III部は、マッキンレー、セオドア・ローズヴェルト両大統領の下でのコーポラティズムの実践が跡付けられ、さらにタフトやウィルソンの外交も、その延長上に位置付けられる。

帝国主義研究についての理論的な再整理をめざした、最後の第IV部では、レーニン型の独占資本主義段階しての帝

国主義論から、一方での新従属派的な世界システム論と、1890年代からの急激な都市化と大企業化に対応し、この傾向を是認する「コーポラティズム」論とに至らざるをえなくなった、論者自身の思想的変遷が開示される。

論文審査の結果の要旨

ウィスコンシン学派のウィリアムズの流れをくむ、ニューレフト的解釈の上にたって、かねて帝国主義研究としては金科玉条とされがちであったレーニン的解釈をはなれ、アメリカ帝国主義の成立を、ひとつには、世界システムのヘゲモニー転換のなかに位置付け、またひとつには、国内経済の変質——いわゆるコーポリット資本主義への転換——と関連づけたうえ、伝統的なアメリカ史理解の二つの筋道、すなわちジェフアソン的・農業的アメリカとハミルトン的・商工業的なアメリカという歴史の二つの見方の統合をもはかった点に、本論文の画期的な意義がある。具体的な外交史、政治史の分析も十分になされているが、とくに、思想史の分析にみるべきものがあると思われ、コナントの先駆性の指摘は圧巻である。

他方、いささか望蜀の感は否めないが、あえていえば、せっかく世界システム論の有効性を唱えつつ、アメリカ・サイドの分析に終始している点が不満である。たとえば、少なくとも、フィリピンないしラテンアメリカからの視座に立つ論考がひとつ含まれていれば、複眼的にこの時代の世界をみる、まさに世界システム論的な視点が確立し得たものと惜しまれる。

ただし、だからといって、世紀転換期のアメリカ帝国主義成立史にかんする研究としては、まれにみる力作であることに間違いはなく、本論文は、博士（文学）の学位申請論文として十分ふさわしいものと判定する。